

BOOK GUIDE

今月のブックガイド

心の痛みを封印して

「自分の体と頭脳をフルに活用」「様々なケースを推察・想定」「自分の行動を効率化・ブラッシュアップ」……こんな男性が紹介されたら“かなりデキるオトコ”の印象をもつだろう。“うちの職場にぜひ来てほしい人材”と思う人もいるかもしれない。私自身も見習いたい。そんなデキる能力をもつうえに、外見はこざっぱりとしており、さらに私生活では恋人や家庭を得ている人も多いとなれば、こんな高スペックのオトコはどこにいるのか!? と思うほど。ところが、実際にいる。性犯罪者として、いるのだという。

本書の著者が紹介するさまざまな性犯罪者の姿は、一般にイメージされがちな“性衝動のままに犯行を繰り返す”無節操なオトコ像とは異なるものだ。事実、性犯罪の多くは、捕まらずに犯罪を完遂するために、きわめて冷静で巧妙な手立てが講じられる。それは、彼らが自分の犯行を「ロールプレイングゲーム」に喩えているように、精密な頭脳プレイである。そのゲームに勝利するための意志の強さ、努力、粘り強さには、驚かされるほどだ。……なぜ、その力をほかに活かさないのか、と。

こうした性犯罪者の姿とそれにまつわる“なぜ”について、性犯罪者たちの手記や彼らの処遇に関わる職員や研究者らへのインタビューから追う本書は、性犯罪の実態や専門的知見をわかりやすく学べる入門書でもある。なぜ性犯罪を繰り返すのか、本人たちの理屈や彼らが置かれた状況をていねいに聴きながらも、彼らの言い分に巻き込まれず、冷静に彼らの考えの“歪み”を指摘していく著者の態度にも学ばせられる。しばしばわれわれは、自己中心的で非道な性犯罪をおかす人に対して極端な怒りや嫌悪感を覚え、「自分とはまったく異なる存在」「抹消するか無視するかしかない、共存しえない



性犯罪者の頭の中

鈴木伸元著
幻冬舎新書
定価 780 円＋税

もの」と考えがちである。声高に厳罰化を要求する一方で、“たかがセクハラ”と笑って見逃してしまうように。まず事実を知ることによって性犯罪の真の問題が見えるはずという著者の姿勢に、気づかされることは少なくない。

性犯罪の被害者が、その後の人生においてどれほどの苦しみにみまわれるかを思うと、その現実とそれを引き起こした性犯罪者の言い分には、とてつもなく深い溝を感じる。性犯罪者の語る言葉は、いずれも「自分の有能性」であり「自分の苦しみ」だ。そこに、目の前にいたはずの被害者の存在はない。それこそが、リアルな『性犯罪者の頭の中』なのだろう。彼らの頭を占めているのは、つねに自分のことなのだ。人生の挫折や苦しみすら、“頭の中”での問題であり、“頭の中”で決着をつけるために、「ゲーム」にハマる。

しかし本来なら、挫折や苦しみは“心の中”の問題である。心で感じ、心で苦しみ、心を解放していくよりほかないものだ。でも、彼らはそれを避けている。まるで、傷つきや恐れ of 感情を封印するために、「体と頭脳をフルに活用」するように。だとすると、自分の感情に向き合えない彼らが、被害者の気持ちを理解するのは不可能だろう。このままでは、両者の溝が埋まることは望めない。

そう考えると、『性犯罪者の心の中』としなかった本書のタイトルは深遠だ。彼らは“心の中”を見せない。彼らが“心の中”に向き合うときこそが、性犯罪から脱する第一歩なのかもしれない。それには勇気が必要だろう。「頭脳プレイ」ではない、リアルな世界で感じる痛みは、彼らがこれまで逃げ続けてきたものなのだから。そして、彼らの“心の中”を見たときに、果たしてわれわれはそれを受けとめることができるだろうか。決して自分と「異なる存在」ではない、むしろ同じ苦しみをもつ存在として、彼らと「共存」できるだろうか。

性犯罪者に変化を求めるならば、社会も変化を必要とする。その覚悟が問われている。

(大阪大学大学院准教授 野坂祐子)